

格闘技

ブラジルの岡本おかもとシドニーしどにー薫かおるさん

カポエイラで交流を！

ブラジル連邦共和国サンパウロ出身
岡本 シドニー 薫さん



▲岡本シドニー薫さん

来日のきっかけ

父が祖父(日本人)の事で来日する事になりました。当時、私は17才で外国に行けるだけで楽しいと思っし、珍しい買い物もしたかったので、父についてきたのがきっかけです。

ブラジルにいるときは知らなかった文化に触れ、もう少し日本で勉強しようと思っし。父の従兄弟の知り合いを通して会社に勤めることになり、川崎勤務になりました。1年間の予定でしたが、「もう半年」と言われ、一度ブラジルに帰りましたが、また同じ会社で仕事に就き19年間続いています。

日本語の習得

挨拶程度では友達もできませんでしたが、会社が「日本語を勉強しなさい」と、夜間日本語教室に通わせてくれました。夜遅くなり、電車がなくなって、歩いて帰ることもありました。

半年後、鶴見の日本語の会話サークルに入会し、プライベートでも話せる友達ができました。

来日して驚いたこと

日本の学校は小・中学校では厳しいけど、高校は緩やかでアバウトですね。ブラジルでは高校に入るのが難しく、大人になる自分に責任を持つことをより自覚させられます。親には絶対口答えはできません。日本に来て、子供が親に

カポエイラとは？

ブラジル文化の一つで、極めてユニークな伝統的な格闘技。「格闘」「遊技」「舞踊」の要素が組み合わさって成り立っている。歴史は古く、労働力としてアフリカから連れて来られた黒人奴隷が、自らが受け継いだアフリカの伝統文化を元に、様々な工夫を凝らし、現在の格闘技として伝えられるカポエイラの原型を編み出したと言われている。

また、身を修めるための宗教的儀礼や哲学・教育的な側面も持っており、その意味では東洋における「道」(柔道・剣道・書道・茶道など)の概念に似ている。

加えて、「ふざけ合う」「化かし合う」といった遊技性もあり、頭脳プレーの奥深い楽しみに充ちている。

(フィリョス・チ・パウマールス)

岡本さんが代表をつとめる「FILHOS DE PALMARES」
<http://filhosdepalmares.esterchan.com/>より

向かって「うるせー」と言うのを聞いてびっくりしました。ブラジルでは、小さい時は親に迷惑をかけても、14、5才頃になると殆どの人は自分に責任を持つようになります。また、両親は敬うべき存在です。私はやっと最近になって、親と冗談を言い合えるようになりました。

カポエイラのきっかけ

幼いときから遊びでカポエイラらしき事はやっていました。昔は危険な競技ということでブラジルでは禁止されていましたので、禁止がとけても偏見から親に「何をやっているんだ」とよく叱られたものです。

日本に来て会社に入り、日本語だけの環境でストレスがたまって、体を動かしたくなり、公園などでストリートダンスを楽しんでいました。

そのうち「ザ・フェイス」というアメリカ人・韓国人・中国人・ブラジル人などの20人ほどのメンバーと知り合いになり、週末にはダンスをしたり、バーベキューをしたりして交流が深まりました。この仲間がカポエイラをやろうということになり、サンパウロのアカデミーでカポエイラを続けていた弟が指導してくれるようになりました。

カポエイラの魅力

相手をノックアウトする競技ではなく、音楽に合わせた技の応酬で点数が決まります。ルールもその時の状況によって決められます。決められた枠の中で、相手に触れずに音楽や歌に合わせて技を変え、メッセージを伝えます。相撲の立ち会いのようなもので、タイミング・水面下の駆け引きなどで、瞬時に技を決めます。

カポエイラをやりながら、「相手の心理をつかむ訓練」をし、「目を離さない」「背中を見せない」「最後まで頑張る」といったことが身に付いてきます。

会社でプレッシャーをかけられてストレスが多くなり、倒れたこともあったけど、カポエイラを始めてからはストレスがうまく解消できて、笑えるようになりました。

一昨年、国が正式にブラジル独自の文化と認め、ルールも正式にまとめられつつあります。現在は115カ国にカポエイラが広まり、グループそれぞれでルールを決めて楽しんで

います。年齢・男女を問わず、誰でもどこでもできるのも魅力の一つです。

(取材・文・写真:

編集ボランティア

福地直子、日地谷美樹)

(写真:交流協会 編集担当 加藤恵美)

プロフィール:

幼少よりサッカー、ハンドボールのクラブチームに所属し競技を経験。1990年来日。

2004年よりピラ・ド・レゲ工師に師事。カポエイラの修行と普及活動を行う。



▲岡本さんとメンバーの本多さん



▲カポエイラの練習風景

